

[連載 6回]

TEXT●中三川大地(Daichi Nakamigawa)

PHOTO●田中秀宣(Hidenobu Tanaka)

バ イタリテイ溢れる男だ。あの
 事故の後、復帰してレース
 に出場するために、市販車のアルフ
 アロメオを改造してレーシングカー
 に仕上げていたことは知っていた。
 チューニングパーツを選ぶ時、既製
 品では満足せず、自らが開発に携わ
 ってオリジナルを開発し、理想の状
 態に近づけようとしていたことも。

復帰から約10年が経った。手探り
 で進めていたレースが軌道に乗った
 後は、オヤジレーサーズやドライビ
 ングスクールなど、アマチュアモー
 タースポーツの発展を願い、レース
 やサーキット走行などを普及させる
 活動に尽力してきた。そうした活動
 とは切っても切り離せないのが「TE
 ZZO」というブランドである。

TEZZOは太田哲也が自らの考
 え方を落とし込むアフターパーツブ
 ランドだ。欧州人が親しみを込めて
 呼ぶ、哲也の「TEZZ(テッツ)」、
 というあだ名を元に、頭文字の「O」、
 あるいは無限大の可能性を持つ意味
 を秘めた「0(ゼロ)」を末尾に付け
 た造語である。その傍に表記された
 ブランドのコンセプトは、KEEP
 CHALLENGING FOR L
 IFE。自らのマシンを走らせるた
 めに始めたパーツ開発が、なぜこう



挑戦を続けるブランド。

太田哲也が主宰する自動車のカスタムパーツブランドが「TEZZO」である。アルファロメオから始まり、
 瞬く間にイタリア車を中心に車種が拡大した。拠点となるTEZZO BASEが誕生したいま、
 活動はより幅広さを増している。今回はこのTEZZOを取り上げ、太田哲也のモノ作りの考え方を捉える。
 そして同時に、彼の描く夢「KEEP CHALLENGING FOR LIFE」の本質に迫る。

した理念を持つブランドへと成長し
 たのだろうか。

「事故の後、新しい職業を探してい
 たとき自分は社会のどこに当てはま
 るだろう、輝くのだろう——ってず
 っと考えていた。自動車評論を中心
 とするジャーナリスト活動もそのひ
 とつ。同時に、俺は昔からクルマを
 セッティングするのが得意だったか
 ら、それを活かせたらと思っただ。こ
 いま思えば現役時代から、世界を見
 渡せば俺より速い奴はいくらでもい
 たけど、クルマの特性をいち早く察
 知して、改善点を見出し、それを適
 切な言葉にしてエンジニアに伝える
 ……その能力は誰にも負けなかった」

太田は現役時代から開発能力の高
 さに定評があった。彼がフェラーリ
 F40やF355で挑んだ全日本GT
 選手権、フェラーリとはいえ市販車
 をイチから造り込み、メーカービル
 ドの純レーシングカーであるボルシ
 エと対等に闘う——ドライビ
 グ技術はもちろん、優れた車両開発
 能力がなければ、とうてい成し得な
 かったことだろう。いま思えばマツ
 ダのワークスでグループCカーを走
 らせていた時代から、車両開発の重
 要性に気づいていたのかもしれない。

そこに、自身が30歳の頃より続け
 ていたインプレッション等の自動車
 評論で感じた気持ちが変わった。

「クルマに乗って、ここが悪い」と
 言うのは簡単だ。だけど、エンジニ
 アの話を開けば聞くほど、実際に造
 るのは大変なんだと分かる。自動車
 メーカーは多かれ少なかれ、万人を
 意識した商品を開発する必要がある。
 特に昨今はコスト意識でがんにがら
 めにされ、環境対応性能もまた大き
 な壁となっている。最初の段階では

アルファ Romeo のチューニングパーツを皮切りに、自身が認めたモデルへのリプレイメントアイテムを積極的に開発。ブランド名の「TEZZO」は、太田哲也氏の頭文字&ニックネームと、無類大をも表現したネーミング。



エンジニアの理想を追求した、俺たちにとって魅力的なモデルであつても、それが最終的に発売される頃になると、多くが大人しくなり、あるいは安っぽくなってしまう」

そこで、太田が持つ車両開発能力を活かして、牙を抜かれた世の自動車よりエモーションナルにする製品を展開しようと思ひ立つ。性能向上はもちろんだが、何もかもを純レーシングカーにしようというわけでは

ない。デザインが美しかったり、音やエンジンフィーリングに興奮できたり、手に取った時眺めただけで美しさの伝わる工芸品のようなものをクルマに与えようと考えた。

それは具体的にどういうものなのだろう。そんな問いかけに対し、太田は「俺はフェラーリを造りたい」と、開口一番、そう言った。

「例えばカローラってさ、乗ると何の不満もないわけ。静かで快適だし、燃費はいいし、年配者が街で乗るぶんには動力性能にも不満はない。対してフェラーリって音はうるさいし運転は難しく、助手席なんかある意味不快だよ。カローラなら許してもらえないような要素が詰まっている。だけどそういうネガティブな要素を含めてフェラーリならではの魅力がある。運転の楽しさはもちろん、部品ひとつ取っても惚れ惚れするほ

ど美しくそれが人間を鼓舞する気がするんだ。カローラだつていつか守りに入ってしまうけど、フェラーリなら常にクルマから刺激を受けて自分自身が新陳代謝できる。フェラーリというクルマは、KEEP CALM AND HALLENGING FOR LIFE を買えるパートナーなんだ。俺はそういう要素をフェラーリ以外のクルマにも与えたいと思つた」

クルマはパートナーだ。互いに刺激を与えあうことによって人生に彩りを添えられる。それを具現するのがTEZZOなのだという。

といても、製品開発ともなれば膨大な時間と労力、そしてコストがかかる。まして太田が思い描く製品は、そのどれもがコダワりに満ちたもの。安直にライ

ンアップを増やすことはしない。ブレーキやサスペンションは、どのモデルも五感を駆使してテストが行われる。自分が納得ゆくクオリティに到達していないと判断すれば、途中で開発を断念することも少なくない。

最初は執筆活動のため、東京に事務所があった太田にとって、それは決して平坦な道ではなかった。

「アルファ Romeo のパーツは自分が乗っていたこともあって昔から造っ



ていた。ところが当時は、雑誌を見て興味を持ってくれた人に製品を見せる場がない。だからまずは横浜に小さなショールームをオープンさせた。すると今度は、部品やクルマをストックする場所や取り付ける工場が必要になってきた。もっと広い場所が欲しいと思つていた矢先に、リーマンショックが起こったんだ」

2008年に起きたこの経済恐慌によって、自動車業界は急速に萎む方向へ向かった、と一般的には思われている。だが、太田はこれをネガティブに捉えず糧にした。

「自動車業界はこれから大変な時期を迎えるだろう、とは思つた。だからこそ、敢えてチャレンジしたほうがいい。いま思えばリーマンショックの影響で空いた広い敷地を借りられたし、量産を委託する部品に対しても、サプライヤーが小ロットから受け付けてもらえるようになった。もし、時代が好景気ならこうはいかない。門前払いだったかもね」

吟味を重ねた「TEZZO」の数々

オリジナル展開しているアイテムは多岐にわたるが、中でも人気はマフラーやブレーキシステム、そして足まわり。いずれも太田哲也氏の開発力が存分に発揮され、妥協のないテストを繰り返した後製品化されている。他にもコンプリートカーやエアロパーツなどの大物から、アパレルなどの小物まで網羅する。



こうして2010年にオープンしたのがTEZZO BASEである。TEZZOのデモカーを飾れる広いショールームに、ゆとりある駐車場も備える。敷地内にサービスマンホールも建てた。ブランドにとっての、ひとつの「城」が完成したのだ。

TEZZO BASEは、ユーザーから生の声が届いてそこからトレンドを掴んだり、太田自身が思つていた以上の成果を上げている。いまではブランドのアイテムも増えた。最初は勝手知ったるアルファ Romeo から始まったが、太田自身が興味を持ち可能性を見出したメイクスなら積極的に開発へ乗り出す方針だ。アルファ Romeo 以外のイタリア車だけでなく、ルノーやVW、トヨタ86/スバルBRZも手がけ始めている。

そうした道を歩む太田に、TEZZOとしての今後の展望を聞いた。

「エンツォ・フェラーリは52歳からクルマを造り始めたんだ。だから俺も遅すぎることはないんじゃないかな。スタッフやサプライヤーたちの「チーム」は、いつか自分たちで、オリジナルのクルマを造りたい。つていう夢を共有している。まずはTEZZOのコンプリートカーを、ゆく



ディーノの復活も間近?

埼玉県のラン・アンド・ランにてレストア作業を進めていたディーノ246GTが、外装の修復を終えてTEZZO BASEに運び込まれた。エンジンや足まわり、その他細部に至るレストアを施せば、いよいよ待望の復活である。今後も作業の成り行きを見守り報告していきたい。

ゆくはオリジナルカーを造って販売したいと思つている。実現できるかできないかは誰にも分からないけど、夢に向かって動き出していくときにこそ生きていくという充足感を感じる。それこそ、KEEP CHALLENGING FOR LIFE なんだ。俺は、いつも夢を追い続けていたい」

自らのブランドへの想いを熱く語る太田には、夢を実現させようという勢いを感じる。KEEP CHALLENGING FOR LIFE こそ、彼のライフワークだ。



夢の発信地「TEZZO BASE」とは?

TEZZOのアイテム群に、実際に触れることができる場所として設立された、まさに太田哲也氏の「夢」が具現化し発信される場所。ショールームとしての役割はもちろん、併設されたファクトリーにおけるサービスの提供、パーツ開発、そして太田哲也氏に共感するユーザーの憩いの場としても機能する。住所：神奈川県横浜市都筑区荏田東2-9-1